

# KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第106号 令和6年(2024年)3月20日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017 神戸市中央区楠町7-2-1

TEL : (078)371-3351 FAX : (078)371-5046



「摩耶詣祭～摩耶山の春山開き～」摩耶山観光文化協会主催

写真：摩耶山観光文化協会事務局提供

摩耶詣の風習は長らく途絶えていましたが平成5年に復活し、現在では摩耶山観光文化協会の事業として3月下旬に行われています

## 摩耶山と俳句

なのはなや魔爺(摩耶)を下れば日のくる、

江戸時代中期の俳人、与謝蕪村が摩耶山で詠んだとされる句です。蕪村が訪れたころの摩耶山麓では、菜の花の栽培が盛んだったようです。菜種を搾った油は灯りの燃料として利用され、搾油には六甲山系の水流を利用した水車が用いられました。

当時、灘の酒造業や兵庫の廻船業などを営む裕福な人々が俳諧を好み、蕪村と交流し、支援していました。蕪村は彼らと摩耶山天上寺にたびたび登詣したと伝えられています。

春の季語には「摩耶詣」「摩耶参」があります。明治の終わり頃まで、旧暦二月初午の日に、飼馬の無病息災を願い、馬を伴って天上寺に参詣する風習がありました。正岡子規も摩耶参の句を詠んでいます。

馬の子や親につれだつ摩耶参

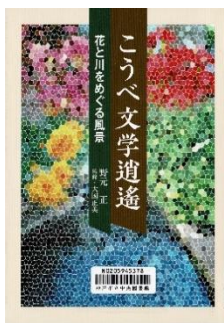
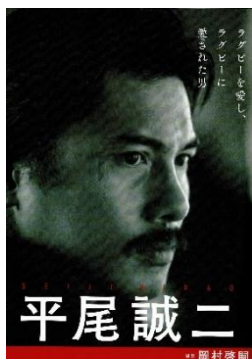
季語として、また俳人ゆかりの地として、俳句を愛する人たちに親しまれる摩耶山。ハイキングの折には、俳句にも思いを寄せて一句詠んでみるのも良いかもしれません。

参考：『摩耶山天上寺』『神戸史談』二一〇号・二三六号 ほか

**こうべ文学逍遙 花と川をめぐる風景**  
野元正（神戸新聞総合出版センター）

著者は、造園学と環境デザインを専門とする神戸市職員として、須磨離宮公園や布引ハーブ園など、多くの公園を手がけた。

一方で文筆家としても活躍しており、本作は著者ならではの視点で、神戸を舞台にした文学作品に描かれた「花風景」と「川風景」を紹介する。例えば谷崎潤一郎の『細雪』は八重紅枝垂れ桜に、芦屋川や住吉川、野坂昭如の『火垂るの墓』は石屋川の松、『源氏物語』は櫛谷川。四〇以上の作品を、充実の写真やコラムと共に取り上げており、読者に新たな読み方のヒントを与えてくれる。



**平尾誠二 ラグビーを愛し、ラグビーに愛された男**  
岡村啓嗣（神戸新聞総合出版センター）

神戸製鋼ラグビー部を日本選手権七連覇へと導いた平尾誠二の写真集。著者の岡村啓嗣は三五年間にわたり平尾を撮り続けたカメラマンである。キャリアごとくに写真をまとめ、スナップショットのよいうな写真も掲載されている。試合に臨むラグーシヤツ姿のほか、気取りのない笑顔や普段着姿の写真もあり、スポーツの枠を超えた交友関係、人柄を写し出している。

**兵庫県史 この五十年の歩み 兵庫県150周年記念 第一巻・第二巻**  
兵庫県史編纂委員会編（兵庫県）

『兵庫県百年史』に続く県史の刊行が始まった。百年史以降の五〇年にわたる県の歩みをたどる。第一巻は、高度経済成長とその終焉期を迎えた昭和四十二年から五十四年までを、第二巻は行財政改革に始まり貿易摩擦、バブル経済とその崩壊に揺れ、経済優先から生活文化重視へ移行した昭和五十五年から平成六年までを収める。政治、経済、社会、文化、教育の五つの分野から県勢を考察する。

**タイガース詩集 松尾正信詩集一**  
松尾正信著 塩尻親雄編（ほっと舎）

松尾正信は東灘区御影出身の詩人。神戸高校時代は野球部で、のちに文芸部に転じた。隣の新聞部には村上春樹が居て親交があったという。本書は、二〇二一年に亡くなった著者を偲んで出版された三冊組の詩集のうちの一冊。「ものごころついた時からタイガースに夢中」と語り、別当、藤村など戦後活躍した選手から、鳥谷、金本など近年の選手の話題を交えタイガースへの愛着を詩にこめた。

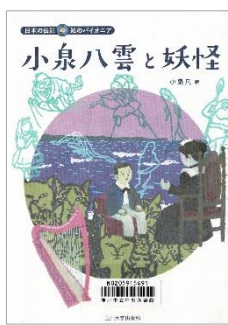
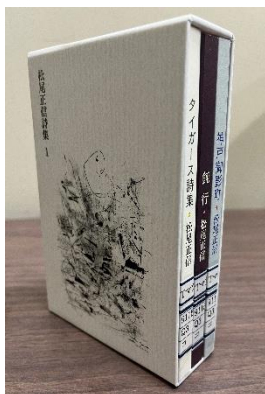
**小泉八雲と妖怪**  
小泉凡（玉川大学出版部）

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の曾孫にあたる著者が、八雲の気持ちになって一人称で語る伝記である。アイルランドで怪談や妖精物語を聞いて育った八雲は霊的な世界に関心を持つ。特に古事記に心魅かれ出雲地方を訪れる。そこで、妖怪さえも時に神様の仲間入りをする日本人の考え方に、優しさや広い心を感じて、その魅力の世界の人々に伝えようとした。紹介されている妖怪話や民話も興味深い。

**聖徳太子と播磨**  
播磨学研究所編（神戸新聞総合出版センター）

本書は、二〇二二年に行われた播磨学研究所主催の特別講座をもとに構成されている。播磨における聖徳太子信仰について、太子町斑鳩寺と加古川市鶴林寺を中心にまとめられている。神戸においては有馬温泉の善福寺や西区太山寺にある太子像が紹介されている。

聖徳太子信仰とは、聖徳太子を聖人として敬い、神仏にも等しい存在として崇拜する信仰のことである。聖徳太子のイメージと史料の比較や、彫像、絵伝、法要といった様々な視点から、聖徳太子信仰と播磨の結びつきが明らかにされている。





「断らない救急医療」を掲げる中央市民病院は、患者受け入れ率の高さと高度医療を担う総合病院として神戸市民に信頼されてきた。しかし二〇二〇年、新型コロナウイルスが猛威をふるった。罹患者の治療と感染防止のジレンマの下、リスクを抑えて患者に寄り添おうとする看護師、治療法を模索する医師や理学療法士、連携して病床確保を図る各所属の担当者など、立場の異なる医療従事者たちが院内感染を乗り越え、未曾有の事態と戦う。患者を救うという信念が胸を打つ。

人間対コロナ 神戸市立医療センター  
中央市民病院の3年 神戸新聞社論  
説委員室編 (神戸新聞総合出版セン  
ター)

中井久夫 人と仕事 最相葉月 (み  
ずす書房)

精神科医の中井久夫は、統合失調症や心的外傷の研究でよく知られている。『中井久夫集』(全一卷。みずす書房)の「解説」を改稿して出版された本書は、中井の生涯にわたる業績をまとめており、阪神・淡路大震災の発災直後から被災者の心的外傷に現場で向き合い、「心のケア」に取り組んできたことも多く述べられている。また、ポール・ヴァレリーを初めとする海外文学への関心や、幼少期を過ごした伊丹市での暮らしなど、専門分野以外の記述も多く、書名が示す通り中井の「人」と「仕事」がよく分かる一冊である。

|| その他の新刊 ||

精力善用・自他共栄 灘校の原点・  
嘉納治五郎の理念 和田孫博 (神戸  
新聞総合出版センター)  
風の調べ 空想とノスタルジーの世  
界 戸田勝久 (The Twilight Press)

神戸 その29  
あんな人こんな人

間人 たね\* はしうど・たね  
弘化4年(1847) ~ 大正10年(1921)



はしうど  
間人たねは、県内初の幼稚園「間人幼児保育場」を開設した女性です。間人家は二ツ茶屋村(現・中央区元町)で、たねの祖父・近直が江戸時代に創設した寺子屋を経営しており、寺小屋は父・近正の代に最盛期を迎え200人以上の子どもが学んでいました。たねも高い教育を受けて育ち、17歳頃からは自宅の寺子屋で師匠として女子に教えていました。

明治5年(1872)の学制発布により、寺子屋は廃止され、塾舎は神西小学校(後の神戸小学校)の仮校舎になりますが、新校舎が完成すると再び間人家に返されました。学制の公布以降、子守り役の年上の子が学校にいるあいだ、学齢に達しない子どもたちが放任されている状況を見ることが出来なかったたねは、周囲の熱い要望もあり、返却された塾舎を利用して明治19年(1886)に「間人幼児保育場」を設立しました。自分に保育の知識や技術が不足していると感じた彼女は、すぐに東京の幼稚園で2週間の実地研修を受け、翌年には大阪の幼稚園に通い最新の保育学を習得します。同年3月、「間人幼稚園」に改称し、開園から12年後には常に50人ほどの園児をあずかる人気施設になりました。間人幼稚園は少人数での個別指導に加えて、保育料は親の負担能力に応じて割引し、不足分は間人家の私費で賄われるという、たねの教育観に基づく経営をしていました。その福祉的な保育料の制度のため神戸市から認可がおりませんでした。閉園までの30年間、名誉の無認可を貫きました。

\*たね子ともいう(『福祉の灯』兵庫県社会福祉協議会編・発行 1971 ほか)

【参考】『神戸の保育園史』神戸市保育園連盟編・発行 1977、『女たちの群像』島京子編(神戸新聞総合出版センター, 1989) ほか

【写真】『神戸区教育沿革史』神戸小学校開校三十年記念祝典会編・発行 1915

御影公会堂

昭和八年（一九三三）、兵庫郡御影町（現・東灘区）に待望の公会堂が建設されました。公会堂とは、市民が集会行事等を行うための公共施設のことです。大正デモクラシーの自由と民主主義を求める空気の中で、大正七年（一九一八）の中之島公会堂（大阪府）を皮切りに多くの公会堂が造られました。御影町でも建設の機運が高まりましたが、予算都合上見送られていました。そこに、灘の酒で知られる白鶴酒造の七代目・嘉納治兵衛が二〇万円を寄付し、公会堂の建設が実現します。現在も一階に、顕彰のため嘉納治兵衛の胸像が置かれています。

設計は、御影町役場、神戸市立生糸検査所（現・デザイン・クリエィティブセンター神戸）などを手掛けた清水栄二が担当しました。清水は神戸市役所で初代営繕課長を勤め、建物の耐震構造について研究していました。昭和元年に退職して建築事務所を六甲に開設し、多くの公共建築を手掛けました。公会堂の外観は

船をイメージしたと伝えられており、丸くカーブした南西のコーナー窓と上部の円形の塔屋が目を引きまします。地上三階、地下一階建てで、大ホールのほか和洋貸室や浴場、地下食堂等が設けられました。



御影公会堂・公会堂寄付者嘉納治兵衛氏  
『御影町誌』（昭和11年・御影町編）

落成式は昭和八年五月二十五日に行われました。翌日の『神戸又新日報』には「公会堂の落成を祝福するため町内各区から山車が八台ひき出され町内を練り廻りお祭り気分で行く大賑ひだった」と町民たちに歓迎される様子が書かれています。公会堂の大ホールは映画会や演芸会場、近隣の御影第一、第二小学校の学芸会に、会議室は町民の集会やお稽古教室に使われるなど、幅広く利用されました。

昭和二十年、米軍による大規模な空襲がありました。野坂昭如の小説「火垂るの墓」では空襲を受けた御影町の様子が描かれており、「えらいきれいさっぱりしてもたなあ、みてみい、あれ公会堂や、兄ちゃんも雑炊食べにいったろ」と主人公・清太が妹の節子に語り掛かっています。公会堂の内部はほぼ全焼しましたが、外壁と地下は残り、救護所が設置され、負傷した近隣住民が運び込まれました。昭和二十五年に御影町が神戸市へ編入した後、復旧工事が行われ、昭和二十八年に東灘区の公会堂として利用が再開されました。

昭和三十二年に公会堂地階に市民総合結婚式場「扇光殿」が開設されました。料金を安価に設定し、「簡素にして厳粛な結婚式を」をキャッチフレーズに、若い世代の人気を得ました。『京阪神の女性に贈る結婚ガイド』（昭和四十四年）では「花嫁の支度から結婚式・披露宴もすべて地階なので、広く落ちついたふんい気」と紹介されており、衣装や着付けの料金は市価の半額程度としています。昭和五十八年に閉鎖されるまでの二六年間で、約二万組もの式が執り行われました。

平成七年一月十七日、阪神・淡路

大震災が起こります。清水による耐震性に優れた設計が功を奏し、御影公会堂は崩れることなく、避難所としての役割を果たしました。一階と二階は被災者とボランティアの人々であふれ、ピーク時の避難者数は約四〇〇人にのびります。公会堂の前では炊き出しも行われました。多くの建物が倒壊した中、変わらず立ち続ける姿は、被災者の心を支えました。

平成二十九年には耐震改修工事が完了し、地下に御影郷土資料室とともに、御影出身で「柔道の父」といわれる嘉納治五郎の記念コーナーが開設されました。戦災、震災を乗り越え町を見守り続けた御影公会堂は、現在も市民の集う場として大切に利用されています。



現在の御影公会堂

※塔屋・建物の屋上に塔状に突き出した部分  
参考文献

『御影町誌』、『公会堂と民衆の近代』、『兵庫県土木建築大鑑』、『神戸復興新聞』ほか